ろらんずめいつ、わるきゅぅれっ！

　自分の体から、熱が抜けていくのが分かる。

　俺が『トラース・ブレイカー』という『チーム』の存在を聞いた時から、少なくともこの『チーム』にこいつはいないと決めつけていた。トラブレの目的が、この異次元空間『トラース』を破壊することだからだ。『研修所』のレジュメにも、そう書かれていた。そんな『チーム』にこいつがいるはずがない。

だって、そうだろう？

「何故だ……何故なんだっ？　なんでお前はここに……『トラース・ブレイカー』なんかにいるっ？」

　自分が悟ってしまったことが間違っていて欲しい。こう思ったのは初めてだ。

「なんでって……そりゃ、トラブレにいるんだから、理由は一つだろうが」

　こいつのその言葉を聞いた瞬間、俺は自分の体が氷のように冷たくなった気がした。

　赤い視界が、スっと細くなり――

「俺は……こんな世界をぶっ壊したいからだ」

「ふ……ふざ……」

　気が付けば俺は、地面を蹴って突っ込んでいた。

「ふざけんな！」

　手に持った『ヘルズ・ギア』を、こいつに向かって思いっきりぶん回す。ガンっという音と共に、黒い刀身がこいつの右横腹にヒットした……かに思えたが、こいつは左拳の、四本の刺付きのカイザーナックルで攻撃を受け止めていた。

「お前は……なんでだっ？」

　俺はカイザーナックルに『ヘルズ・ギア』をぶつけた時に生じた、反対向きの衝撃を利用して回転する。そして、斜め上からこいつの左肩の辺りに刀を振り下ろした。しかしこの攻撃も、こいつは今度は右拳のカイザーナックルで弾いて防いだ。

「ここを……『トラース』をぶっ壊したら、俺達が『研修所』で過ごした日々は、一体なんだったって言うんだっ？」

　右横腹への回転斬り、右肩への振り下ろし、右腕、左肩、左横腹。次々と繰り出す俺の打ち込みを、こいつは全てカイザーナックルで弾く。

「『楽しかった』って……言ってたじゃんかよ！」

　ガンっという音が響く。真上から振り下ろされた『ヘルズ・ギア』と、カイザーナックルが激突した。

「俺は楽しかった！　おまえと一緒に勉強して、遊んで、一緒に過ごした日々が！　それだけはお前も同じだと思っていた！」

　もう一度刀を振り上げ、こいつのカイザーナックルに叩きつける。

　信じたくなかった。

　こいつが名前を変えたのは勿論腹立たしかったが、それでも『腹立たしい』ですんでいるのは、俺はこいつの、あの『楽しかったさ』という言葉だけは、嘘偽りのない、本当のことだと信じていたからだ。

「……楽しかったさ。それは俺も同じだ」

　そのまま地面にねじ伏せようとする俺に、こいつは抜け抜けとそう言った。押し込もうとする黒刀が、少しずつ上がっていく。

「だったら……」

　俺は『ヘルズ・ギア』を握る腕に、力を込める。上がり続けていた刀身がピタリと止まり、そして再びカイザーナックルを押し戻し始めた。

「なんで『トラース・ブレイカー』になんか……この場所を壊そうとするんだっ？」

　こいつは、何も言わない。その沈黙が、さらに俺の体から熱を奪っていく。

「お前は最初から……ここを壊すつもりだったのかっ？　答えろよ！」

「……それを言う必要は、ない」

　それを聞いた瞬間、俺は、自分の体が凍りついたのを知った。

「言え……言えよ……」

　再び押し戻される刀身に必死に力を込めながら、俺は呟く。

　そんな俺に、こいつは、最終通告だと言わんばかりに首を横に振る。

　だがその瞬間、こいつは俺の刀身に思いっきり地面に叩きつけられた。

「答えろって……言ってんじゃん！」

　まるで自分の体じゃないような感覚に、俺は陥っていた。頭上に持ち上がる刀身が軽い。

　だが、それを振り下ろすと同時に、こいつは地面を横に転がって攻撃を躱す。

「悪いが言えないっつってんだよ……分かれ」

「五月蝿い！　答えろよ！」

　急いで立ち上がるこいつに、俺は『ヘルズ・ギア』を真横に振る。立ち上がったばかりで、まだ呼吸の整っていないこいつに躱す術は無い、完璧な一撃。

そのはずだった。

　だがまたしても刀身は、こいつの左手についたカイザーナックルに音を立てて止まる。それならそれで、そのままぶっ倒すまでだと思った矢先、不意に『ヘルズ・ギア』が上に跳ね上がった。それが、こいつが右手で『ヘルズ・ギア』を下から殴ったことによるものだと気が付いた時にはもう、こいつは地面を蹴って一気に俺との間合いを詰めていた。

　刹那、腹に何か重い物がぶつけられる、そんな感じを俺は覚える。下にぶれる視界。そこにはこいつの拳が映る。そして、多分俺の口から、何かが雫となってこいつの袖の上に滴り落ちていた。

　拳が俺の腹から抜けると同時に、俺はその場にがっくりと膝をつく。地面に、何か液体が、少しだけこぼれていた。拳があった場所を手で押さえると、濡れているのがはっきりと分かる。顔を上げれば、こいつは表情一つ崩さず、自分の拳――ではなく、そこにあるカイザーナックルの刺をジーッと見つめていた。全部赤いので分かりづらかったが、その濃淡から、刺の先が濡れているのが見えた。

　多分、血なんだろう。カラコンしていて助かった。

　ふと、叫んだことで、殴られたことで、少し頭が冷えたらしいことを知った。

　もう体はガタガタしているが、それでも俺は立ち上がる。そこで、俺は自分の手に『ヘルズ・ギア』が握られていない事に気が付いた。目だけ動かしてキョロキョロと周りを見ると、自分の足元に落ちている。

拾おうとした、その時だ。

「とにかく、なんで俺がこの『チーム』にいるのかは言えねぇ……でも、これ以上やり合うつもりはないから、早くあの子の所にいってやれよ」

　誰のことだか、一瞬俺には分からなかった。俺の腕が、空中でピタリと止まる。

　少し考えて、こいつがレイの事を言っているのだと、気が付いた。

　どうやら、彼女はまだ戦っているらしい。

「……おい！」

　こいつの言葉を聞いて、確かにそうすべきかもしれないと思わなかったと言えば嘘になる。

　それでも、俺は止まっていた腕を、『ヘルズ・ギア』の方に向けた。

「……あいつなら平気だ。強いし、それに最悪他の仲間が助けてくれる」

「他の……仲間？」

「ああ。だから大丈――」

「ざけんなっ！」

　こいつのその声で『トラース』の空気が揺れる。俺は思わず体をビクッと震わせ、拾いかけていた『ヘルズ・ギア』が俺の指から落ちて地面に音を立てた。

「『他の仲間』……って、それはお前だってその中の一人なんじゃねーのかっ？　お前にとっても、大切な仲間なんだろっ？」

「……否定はしない」

「だったら、お前が助けろよ！　他の誰かじゃなくて、お前自身で『大切な仲間』ってやつを守らなきゃなんじゃないのかっ？」

　皮肉にも、その言葉が俺を動かした。

「お前が……」

　俺は今度こそ、『ヘルズ・ギア』を拾い上げ、

「お前がいなけりゃ……とっくにそうしている！」

　そして『ヘルズ・ギア』を引きずるようにして、俺はこいつに突っ込む。

「お前の言う、俺の『大切な仲間』ってやつを傷つけてんのは、どこのどいつだっ？　お前らだろっ！　違うかっ？」

「そうだけどよ……でも、そりゃ仕方ねーだろっ！」

　違う『チーム』なんだからよ、と叫ぶこいつの声が耳に入る。『ヘルズ・ギア』を握る俺の手に、血管が浮かび上がった。指の先で何かが割れ、痛みが走る。次いで、ヌルッとした生暖かい液体が指を伝って刀の柄に流れる感触が、手の平に伝わるのが分かった。

「別れたかったくせに」

「……ぁん？」

「別れたかったくせして、随分な言い方だな！」

　今日何度目かの、ガンっ、という音が響く。

　それでも、こいつのカイザーナックルに『ヘルズ・ギア』がぶつかった反動を利用して、俺は回転斬りを繰り出す。

　だが、回転する視界は途中で止まる。振り抜けない黒刀が、俺の肩の筋肉を泣かせる。

「何が『随分な言い方』なのかは知らねーけどよ……まぁ『別れたかった』ことは否定しねーな」

「なんっ……？」

　黒刀が止まった位置に恐る恐る目を向けると、そこにはこいつのカイザーナックルが。あろうことか、今日一番の会心のこの一撃を片手で受け止めやがったらしい。

　あまりのことに、俺は黒刀がカイザーナックルにぶつかった時の反動を利用し損ねていた。

　後方へと僅かに弾かれる黒刀は、重力の力で俺の体を地面へと引っ張っていく。気が付けば俺は、地面に無様に仰向けになっていた。

「なんでそんな風になっちまったんだよ……」

　倒れた俺を見下ろすような視線を感じると共に、そんな声が俺の耳に入る。

「そんな奴に……なんでなっちまったんだよ……」

「……」

　ゆっくりと、こいつは俺に近づいてくる。

「もし彼女が助けを求めているんだったら、それはお前も含めての『仲間』なんじゃないのか？　あんな……『俺には関係ない』みたいなことを言っていい人じゃねーだろうが」

「……」

　こいつの言葉は、俺の頭には入ってこなかった。もう、どうでも良かったのかもしれない。指一本動く気がしなかった。倒れた衝撃で、体のどっかがおかしくなってしまったのかも――

「おい……聞いてんのか、ロラン！」

「……は？」

　自分でも、その声が不思議なくらいはっきりと聞こえたのを覚えている。

　気が付けば、俺は動かないはずの体を酷使して、飛び起きていた。

　刹那、俺は手に握られた『ヘルズ・ギア』を放り投げ、

　そして、もう一本を鞘から抜いていた。

「っ！」

　こいつも、この一撃は受けたらマズイと直感したのだろう。辛うじて、この一撃を後ろに下がることで躱していた。

「お前が……」

　振った刀を反対側に返し、俺は声を振り絞る。

「お前が、その名前を呼ぶな！」

「っ？」

「この白い刀身は……お前の魂を、痛みより早く浄土に還す！」

　叫ぶと同時に、俺の背中に嫌悪の風が吹き抜ける。

　こいつに名前を呼ばれることが、どうしようも無く嫌で嫌で堪らなかったのだ。

　理由は……多分、分かっている。

「おまっ、それはっ？」

　こいつも驚いていた。そりゃあそうだろう。人に向けて振っていい代物じゃない。

　でも、俺には関係無かった。

　勢いよく地面を蹴って、俺はこいつに突っ込む。負けじとこいつも左右へ、後ろへと逃げ回るが……

「ぜあぁっ！」

「くっ……！」

　ついに、俺の一撃がこいつに届いた。いや正確には、こいつの右腕に掠っただけだが、

「……つっ！」

　それでも、その一撃は容易くこいつの肌を斬り、その傷跡が広がっていき、

　やがてその傷が、こいつの人差し指を切り落とした。

「っがは……！」

　ぼとっと落ちた指の切れ端が、暫く生き物であるかのように痙攣していたが、すぐにピクリともしなくなる。

　そして、そこから何かが流れ落ちる。それが血だと分かるのに、そう時間はかからなかった。

　血を見ても、俺はカラコンをしているから、俺は全然平気だ。

「……まだだ。ここから――」

　こいつにそれを気にする暇など与えないよう、俺は前に進むために体を前に倒す。

　だがその瞬間、

「――っ！」

　俺の体を、今まで経験したことのないような衝撃が襲い、

　グワッと、俺の視界が回転する。いや、回転というよりは、戻っている、というのだろうか？

「あがはっ……？」

　自分でもよく分からない声を上げる。俺の視界は、まるでビデオを逆再生でもしているかのように回っていた。

『ヘルズ・ギア』の一撃をカイザーナックルで止められた時。

　こいつを『闘悟』と叫んだ時。

　レイにトラブレの相手を任せた時。

　ロボット相手に戦っていた時。

『トラース・ブレイカー』を見た時。

　そして、こっちに来た所まで戻った所で一瞬止まる。そして一気に、今、この景色まで早送りで進んでいった。

　余りの速度に、俺は乗り物酔いをしてしまった時のような吐き気を催し、

「……え？」

　いつの間にか、俺は地面に倒れていた。

　一分三十秒。『』を迎える、その時間。

　この制限時間。これが疾うの昔に過ぎ去っていたなど、俺が気がついたのはそのすぐ後だ。

　五分と十二秒。

　俺がカラコンをつけてから、ここまで長い時間戦い続けていたのはこれが初めてだ。以前にも制限時間を無視したことがあったが、その時はせいぜい数十秒程度。どうも、こいつへの怒りで頭が一杯になってしまっていたらしい。

　あの時も急に体が動かなくなったが、今回はその比では無かった。

　声すら出せない、文字通り『指一本』動かせない。辛うじて、視界と脳みそ、それに心臓は動いているみたいだが……それでも、俺の体が次第に冷えていくのが分かる。

　血管すら、働きが悪くなったようだ。

「……ロラン？」

　うるさい。お前が、俺の名前を呼ぶな。

　そう思っても歯噛みすることすら出来ないのが、こんなに腹立たしいものだとは。

　だがこの時、俺はもっと重大なことを失念していた。

「――？」

　こいつの口がパクパクと動いているが、俺にその声は届かない。俺の目は、ある一点に釘付けになっていた。

　視界が、『赤以外の色』が写していたのだ。いや、『それでも尚、赤い色を映し出していた』という追加のこれは必要か。

「……い、おい！　ロラン、お前、なんで震えてんだっ？」

　焦ったようなこいつの言葉は、聞こえてはいても理解は出来ない。

　何度も呼びかけられてはいるものの、俺の目は『それ』から逸らせなかった。

　映るのは、血。こいつの腕から、そして切り落とした所から滴り落ちる、夥しい量の『それ』だ。

　ＰＴＳＤ。

　俺の、最大にして究極の弱点。たった一滴の血で、俺は負ける。それを補完するためのカラコンは、倒れた時の衝撃でどこかに落ちてしまったようだが、今の俺に、それがどうこうと考えている余裕など無かった。

「……ぁぁ」

『』が少し弱まったのか、俺の喉からは掠れたような音が漏れる。

　体中が痛い。肢体を動かせないのに、無理に動かしたからだ。

　声が制御出来ない。もはやこの体は、ＰＴＳＤに支配されてしまったからだ。

　何も聞こえない。自分の口から絞りでる音が聴覚を奪っているからだ。

　何も見えない。視界は全て、血で覆われているからだ。

　何も考えられな――

　そんな俺の体を、誰かが支えていた。